

Title	金平浄瑠璃成立の基盤 : 明暦・万治頃の連作物の浄瑠璃
Author(s)	秋本, 鈴史
Citation	語文. 1984, 43, p. 10-28
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68717">https://hdl.handle.net/11094/68717</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 金平浄瑠璃成立の基盤

——明暦・万治頃の連作物の浄瑠璃——

## 秋 本 鈴 史

I

義太夫節が成立する以前の浄瑠璃は、一般に「古浄瑠璃」と総称される。またこの「古浄瑠璃」という言葉が、価値判断を伴って使われることがある。すなわち近松以前の「古い」浄瑠璃、素朴ではあるが未発達な段階の浄瑠璃という意を含んで使われるということである。また浄瑠璃史においても、近松以前については発達史として扱われることが多い。これらは、特に明治以後顕著になってくる。近松作品の評価と結び付いてできた考え方のように思える。

しかしこの様な近松を規準とした発達史的観点では、古浄瑠璃をその時代の中で十分に捉えることはできないであろう。それは近松に結び付くことや、発達の目安や指標となるものには注目されるが、それ以外のものにはあまり関心が向けられず、基本的には古浄瑠璃時代を近松までの過程として扱う為、それぞれの時代の中で生き生きとした状況を再現し得ないからである。勿論古浄瑠璃に関して、正本集が刊行される等基礎的資料が次々と紹介され、正本や太夫に関する精緻な研究は先学の手で着実に積み重ねられてきている。しかし浄瑠璃史という視点から再考しようとする試みが、近年あま

りなされていないと考えられるのである。

そうした従来の古浄瑠璃史の中で、発達の第一段階として記述されてきたのは、金平浄瑠璃の登場ということである。「浄瑠璃は金平の登場で初めて近世に入った」(室木弥太郎氏『語り物(舞・説経)の研究(古浄瑠璃)』)といわれるように、浄瑠璃はこの時、坂田金時の子供「金平」という新たなヒーローを世に送り出したのである。金平浄瑠璃は確かに浄瑠璃にとって初めての創作といえるものであっただけに、一時期を画するものといえよう。しかし後の研究においてはこの時期の浄瑠璃は専ら金平物で代表されて考えられ、主人公の金平を産み出した社会的背景等には多くの関心が向けられる反面、金平物の誕生をこの当時の浄瑠璃の流れの中で考えようとする事は、殆どなされてきていないように思える。たとえ金平浄瑠璃が、いかに飛躍的なものであったとしても、そうしたものを作り出す基盤は当時の浄瑠璃の中にあつた筈である。

そこで従来の研究ではあまり論じられる事の無かった、この金平浄瑠璃成立の基盤という事について、浄瑠璃史的な視点も考慮に入れて考えてみたい。

金平浄瑠璃を産み出した明暦・万治という時代は非常に短い時期であるが、浄瑠璃の最初の大きな転機であった事は間違いない。この変化の波は各方面から押し寄せ、語り手である大夫の世代交替という面に特に顕著にあらわれる。<sup>(注2)</sup>京では寛永期から活躍してきた若狭掾左内や、伊勢嶋宮内が相次いで死に、江戸でもこの地に浄瑠璃をもたらした薩摩浄雲や杉山丹後掾は既に老齢になってきていた。こうした時代の中から次々と若い大夫が輩出してくるが、これらの大夫の受領という形で、同時に興行権も整備されたものと考えられる。<sup>(注3)</sup>これらの若き大夫の一人に江戸の和泉大夫がおり、彼を中心として語られたのが金平浄瑠璃であった。

それでは浄瑠璃の最初の創作とされるこの金平物は、どのようにして作り出されたのであろうか。この事に関する研究としては、室木弥太郎氏の指摘された「連作」という事が殆ど唯一のものである。それは酒典童子退治で知られる頼光四天王の物語を語り継ぐところから、武綱・金平等の子四天王が登場する作品を産み出し、更にその子四天王も死んでいく作品が次々と連作<sup>(注4)</sup>として作られ、和泉大夫によって語られたのではないかというものである。数多くの金平物の浄瑠璃正本の詞章内容の検討から導きだされたこの連作という考えは、根拠とされた正本の刊年等に猶検討すべき点も残るものと思われるが、首肯すべき重要な指摘であらう。

ところが金平物が作り出されたこの時代には、この他にも連作になった浄瑠璃がある事は以前より知られており、また最近新たに数種が指摘されている。同じ連作物という事もあり、金平浄瑠璃の成

立にも関係するのではないかと考えられるが、互いに関連付けて論じることが現在まで殆どなされていない。そこで本稿では、連作物という観点から金平浄瑠璃の成立の背景を考えてみたい。

現在知られているこの時期の連作物、あるいは連作に類する浄瑠璃の主なものには次のようなものがある。

- (1) 浄瑠璃御前物語(浄瑠璃十二段)
- (2) 曾我物語
- (3) 義経記
- (4) 秀平三代記
- (5) 為朝一代軍記
- (6) 前九年・後三年の役関係の浄瑠璃

この他にも正本は現存しないが、「太平記」のように続き物として語られた可能性もあるものもある。いずれにしてもこれら連作物の浄瑠璃は、明暦以前には殆どみることのできないものであり、この時期に特徴的なものとすることはできよう。

しかし連作として作られた続き物というのも、この期の浄瑠璃が初めて作り出したものではないと考えられる。長篇の物語を時間に限られた場で語ったり演じたりする場合には、続き物という形になるであろう事は十分考えられる事である。現に舞曲の中にも、曾我物や判官物・常盤物といった一連の連作になった曲がある事は、既に指摘もされていることである。<sup>(注5)</sup>

浄瑠璃の場合においても、(1)の「浄瑠璃御前物語」はそうしたものに相当するであらう。これが続き物として語られたのではないかとされたのは横山重氏である。万治頃刊行の長門掾正本に『ふきあげ』があるが、これと早大演劇博物館蔵の江戸又右衛門板の『上る

り御前十二たん」とは挿絵の筆が同一らしいといわれる。また伊勢嶋宮内の正本に『ふきあげひてらひ入』があるところから、『ふきあげ』に続いて『ひでひら入』もあつたのではないかとされる(『古浄瑠璃正本集』第二解題)。従つて横山氏は『上るり御前十二たん』・『ふきあげ』・『ひでひら入』が、江戸の長門掾によつて語られた一連のものと考えられたようである。

「浄瑠璃御前物語」はよく知られているように、浄瑠璃という芸能の名称の元となつた物語であるが、本来は峯の薬師の靈験を語る長篇の物語であつたらしい。信多純一氏は諸本の本文校訂をなされた結果、原「浄瑠璃」が吹上や五輪碎までを含む本地物の構造をもつ物語であることを明らかにされた(「浄瑠璃」の原像)。「しやうり十六段本」所収)。これに対し室木氏等は、浄瑠璃姫と御曹子の恋愛譚以降の吹上・五輪碎等の後半部は後の増補ではないかとされるが(『前掲書増訂版』)、その増補も操り成立以前と推定されており、少なくとも操りが成立する慶長頃には既に長篇の物語であつたことだけは間違いない。

しかしこの物語は古くから語られていた事もあり、五輪碎等は既に独立した曲として語られていた可能性もある(注6)。横山氏は挿絵等から長門掾正本を一連のものとして推定されるが、『ふきあげ』の正本の板心に「上」とある事からもこの事がうかがえるように思う。横山氏はこれを上巻下巻の意と解され、むしろ「秀衡入」の存在を推定されたのであるが、江戸板の正本で板心に上下の区別をしたものを現存本の中にみる事はできない。これは上方板に特徴的なもので、初期の浄瑠璃本が上下二冊で刊行された名残りであろう。江戸板の出版は上方より遅れ、初めから上下の区別がなかつたのではないかと

考えられる。従つて『ふきあげ』にある「上」の文字も上巻を表わすのではなく、「上るり物語」の意と解した方がよいのではないだろうか。もしそうだとすれば、この本が長篇の一部として刊行された事がより明白にならう。

また本文詞章の面からも、これらが一連のものである事を知る事ができる。『ふきあげ』は熱海美術館蔵の絵巻『上瑠璃』に近い本文を持ち、「上るり御前十二たん」は熱海絵巻と同系の本文を持つ前島古活字本と殆ど一致する。従つてこの二つの本は同系の本文でつながつているとみる事ができる。前島本は吹上部分を持たない為、長門掾が直接扱つた長篇物語を現在知る事はできないが、熱海本に近い本文を持つ物語であつた事が推定される。

このように「浄瑠璃御前物語」では、長篇の物語を浄瑠璃として語る為に続き物という形をとつたものと考えられる。しかしその本文詞章は既にあつた物語のものをそのまま借りてきたものであり、浄瑠璃として手を加えたものではなかつた。これは「浄瑠璃御前物語」という浄瑠璃にとつていわば特別のものであつた為かもしれないが、その浄瑠璃化の方法は寛永期以来のものと同じといつてよい。金平物創造の背景としては、同じ連作物であっても浄瑠璃化に際し、より独自に手を加えられた作品を考える必要がある。

### III

「曾我物語」や「義経記」の場合も長篇の物語を浄瑠璃化したものと考えられる。ではそれらはどのように作られているのであろうか。そのことを考える前に、まずその前提となる問題について整理しておくたい。

「曾我物語」や「義経記」の浄瑠璃正本が、明暦から万治頃に七巻七冊の形で刊行された事を最初に指摘されたのも横山重氏である(『古浄瑠璃正本集』第二・第三 解題)。当時刊行された本は殆ど残っていないが、「曾我物語」の場合には明暦頃に江戸で刊行された本の再印本と考えられるものが、五巻分現存する。また時代が下って元禄五年に江戸鑑屋板として、明暦板の再印本と同内容同一詞章の本が刊行され、六巻を除いて現存する。これらは江戸の本であるが、万治頃には上方へ入ったと思われ、万治四年四月に大和少掾正本として『曾我 石橋山合戦』が山本板として刊行される(東大旧蔵本「願原ノート」による)。従って「曾我物語」の場合、まず江戸で語られ、後すぐに上方へ入ったと思われるが、明暦頃の形も元禄板から十分復原して考えることができる。

また「義経記」については、古い江戸板は知られていないが、万治頃の上方板が現存する。従来より初巻(『義経記初巻』)と五巻(判官吉野合戦)の存在が知られていたが、最近四巻の正本も紹介された(注7)。これは初巻と同じく大和少掾正本であるが、板元は初巻が八文字屋であるのに対し、四巻は山本九兵衛板である。従って大和少掾正本として山本と八文字屋から殆ど同時期に、二度にわたって刊行されていた事がほぼ確定になった。この「義経記」の七冊揃った本には、後の元禄二年に江戸鱗形屋から刊行された土佐少掾正本があり、内容詞章共に万治の上方板と一致する。「義経記」の場合も横山氏が推定されたように、万治の上方板に先行する江戸板があったと思われる。その元の形も元禄板などの現存本から復原する事が可能である。

ところで七巻七冊の浄瑠璃は、元禄頃になって「平家物語」や「太平記」等が相次いで刊行されている。そしてこれらが上演されたの

ではなく、浄瑠璃本の形をとった読本ではないかとされている(古浄瑠璃正本集』第七 解題)。従って今問題にしている七巻物も、上演されたかどうか問題となろうが、この時期には太夫名のある正本が刊行されている事もあり、少なくとも当時は操りとして上演されていたと考えてよいであろう。この事を裏付ける資料も最近出てきた。安田富貴子氏や土田衛氏により紹介された紀州の「三浦家文書」がそれである(注8)。その中の石橋正菴日記といわれる「家業」の万治四年(寛文元年)四月十七日の条に、「和州貞則歌浄瑠璃干弱浦曲」とあり、下に「義経記始于三日终于九日」「曾我記始于十日终于十六日」と二行に分けて記されている。四月十七日の家康の命日を中心にした紀州東照宮の祭礼の折に、大和少掾藤原貞則が和歌浦で浄瑠璃興行を行ったと思われる。その曲が「義経記」と「曾我物語」であり、正本の刊行とはほぼ同じ頃に和歌山でも語られていた事がこの記事から判明した。また正本に「初日」「二日目」などとある所から、七巻が七日に分けて上演されているのではないかと推定されていた事も、この日記に興行の日程が記されていた事から確証を得た事になる。

さて、それではこのような七巻物の浄瑠璃の内容はどのようなものになっていたであろうか。軍記物語としての「曾我物語」や「義経記」は、当時既に整版本として刊行されており、曾我物や判官物を含む舞曲も「舞の本」として刊行されている。浄瑠璃もこれらを借りて作品を作っている事は、本文詞章を比較すれば明らかである。「曾我物語」については、既に鳥居フミ子氏によって典拠との関係が論じられている(『曾我物古浄瑠璃について』「実践女子大学紀要」第六集)。従って長篇の物語を先行文芸の詞章を借り、浄瑠璃用に分割するという形は「浄瑠璃御前物語」と同じではないかと考えられる。

しかし物語全体をどのように構成するかという事に関して、浄瑠璃と先行文芸の間には大きな隔たりをみる事ができる。まず「曾我物語」の場合でその事を考えてみたい。

軍記物としての「曾我物語」の流布本（以下区別のため、「流布本」と略す）は、全十二巻の長大なものである。浄瑠璃としてはそれを七巻にまとめるのであるから、省略が行なわれるのは当然である。横山氏も正本集の解題の中で、流布本ではかなりの分量を占める和漢の故事の引事を、浄瑠璃では殆ど省略している事を指摘されている。しかし単にそのような省略だけで作られている訳ではない。それは浄瑠璃が七巻の内の三巻を使って語る内容が、流布本では全十二巻の内わずかに二巻の部分にすぎないという事があるからである。

初巻は物語の発端ともいえる入道叔心の死と、それによって起こる一族間の所領争いを内容とする。しかしこれは流布本では巻一の中の「伊東を調伏する事」を中心にしたわずかに三章程で済まされている部分で、曾我兄弟からいえば祖父の代の出来事にあたる。

また二巻は流布本の巻一後半から巻二の前半の数章の部分に相当し、仇討ちの直接の因となる兄弟の父親が討たれる事を内容とする。三巻は後の兄弟の運命を決める事にもなる頼朝の旗揚げである石橋山合戦を内容とし、流布本では巻二の後半部に相当する。

浄瑠璃の前半三巻においてはこのように大筋では流布本の叙述に従っているが、流布本で簡潔に描かれている部分をもむしろふくらませ増補しているのである。こうした事によって、仇討ち前史ともいえる一族間の争いの過程がより詳しく語られることになっている。しかし前半部が詳しくなった反面、四巻以下の後半部においては、流布本と比較してもかなりの省略がみられる。特にそれが目立

つのが五巻であり、これは流布本全体の三分の一を占める巻四後半から巻八の初めまでの長大な内容にあたる。舞曲でも、元服曾我・和田酒盛・小袖曾我・劔讃嘆に相当する所で、兄弟の仇討ちまでの長い辛苦を描く部分である。浄瑠璃ではこれを母との別れにあたる「小袖乞」を中心に、兄弟と由縁ある人の別離という事を主要内容にし、他の部分を大幅に省略して一巻の中にまとめている。しかし同じ後半部でも六巻は物語の中心となる仇討ちを内容とする為、既によく知られていたと思われる舞曲の「夜討曾我」と「十番切」の詞章をそのまま借りて一曲としている。そして仇討ちの後日譚といえる七巻では、また流布本を省略して一曲にまとめているのである。

このように七巻物の「曾我物語」は、流布本や舞曲を借りて物語の全体を描いているのであるが、その全体は流布本とはかなり違ったものになっている。特に兄弟が登場する以前の部分を流布本以上に詳しく語ろうとする所に、浄瑠璃の特徴をみる事ができよう。それはなぜ曾我兄弟の仇討ちという事が起こったのかという原因を語る所に、より浄瑠璃の関心があつた為ではないだろうか。そうした原因と結果を明らかにして描こうとするのがこの場合の浄瑠璃化における基本的な姿勢とみてよいであろう。

こうした姿勢は、仇討ちという物語全体の主題だけではなく、その間に起こるさまざまな出来事の描き方の中にもみる事ができる。たとえば兄弟の父親を暗殺するのは、流布本でも描かれているように工藤祐経の郎党、大見小藤太と八幡三郎の二人であり、これは浄瑠璃でも二巻の中で語られている。しかしこの二人が祐経の郎党に加わる経緯やその後の行動については、流布本をはじめ現存する他の曾我物にもみることができないにもかかわらず、浄瑠璃だけが語

っているという事がある。従って浄瑠璃が付け加えた話ではないかとも考えられるが、この話があることよってなぜ二人が兄弟の父を殺す事になったのかという背景が明らかになる事になっている。工藤祐経は兄弟の祖父により父親を殺され所領を奪われるが、浄瑠璃ではそうした窮地にも最後まで付き従うのがこの二人の郎党であるとしているからである。

また石橋山合戦で互いに敵対して争う、俣野五郎景久と佐那田与一義定の話にも同様のことを指摘する事ができる。この話は流布本にはみることができないが、既に正保板の宮内正本『石橋山七きおち』にみえるもので、当時は広く知られていた話であったと考えられる。ところが浄瑠璃では、この石橋山合戦以前にも相撲場で大石をめぐって、この二人が力比べをして争っていた事が語られている。

この相撲場での争いの話は、浄瑠璃では六巻に流用されている舞曲「夜討曾我」の中で回想場面として描かれているもので、詞章も舞曲のものを借りている。従って浄瑠璃ではこの話の部分だけを、相撲場のある二巻に移したものと思われる。しかしこの話の順序を入れかえるという事によって、別々に語られていたのでは分らない二人の争いの過程が明らかになる事になっている。相撲場での争いでは佐那田の勇力が評判になるが、その佐那田も石橋山合戦では一騎討ちの結果、遂に俣野に敗れ戦場の露と消えてしまうのである。

浄瑠璃ではこのように物語の中で起こる種々の出来事についても、その起因と結果を明らかにして描こうとする為、物語の展開は流布本よりかなり整理され、分りやすいものになっている。またこの事は同時に、物語に登場する多くの人物を整理し、それぞれの役割をはっきりさせる事にも結び付く。この事はこれが操りとして上演さ

れるという事にも関係するのであるが、連作物の浄瑠璃という事に關してより興味深い事は、因果関係でつながる話の多くが、同じ巻にあるのではなく続きになった巻に分かれているという事である。大見と八幡の話の場合には、彼らが祐経の郎党に加わる話は初巻にあり、暗殺事件は二巻で描かれている。俣野と佐那田の話でも、相撲場での争いは二巻で語られ、石橋山合戦での一騎討ちは三巻で語られる。また後に兄弟の仇討ちを蔭から援助する事になる畠山重忠や和田義盛の話でも、彼らが頼朝の軍に加わる事は三巻の石橋山合戦で描かれるが、四巻では彼らの懸命の助命嘆願によって、幼い兄弟の命が助かるという事が語られているのである。

こうした事が起こるのも、基本的には浄瑠璃が時の継起する順に従って物語を語ろうとする為と思われるが、連作物の浄瑠璃という立場から考えると、それぞれの巻の間の連続性を作り出す事にもなっていると考えられる。勿論本来が長篇の物語という事もあり、各巻の話に連続性があるのは当然であろう。しかしその連続性が浄瑠璃の中で具体的にどのように考慮されて作られているのかという事が問題となる。曾我は何代にもわたる物語であり、浄瑠璃でも各巻で中心となる人間が変ってくる。そうした中心のな人物をめぐる話でも連続性は考慮して作られていると思われるが、それ以上にこれらの協役的な人物の話によって連続性が作り出されている事が注目される。特にそれが初巻と二巻、二巻と三巻、三巻と四巻というように、各巻の間を鎖でつなぐようになっていのが特徴であり、それは七巻全体にわたってみられる。この様子をまとめたのが「表一」である。

こうした連続性のあり方は、角田一郎氏が寛永期の浄瑠璃の段や

七卷	六卷	五卷	四卷	三卷	二卷	初卷	
	祐経 ←	祐経 ←	祐経 ←	祐経 ←	祐経 ←	工藤 祐経 ←	中心的な人物
				祐親 ←	祐親 ←	伊藤 祐親 ←	
頼朝 (兄弟) ←	頼朝 ←	頼朝 ←	頼朝 ←	頼朝 ←	頼朝 ←		
母 ←	兄弟 ←	兄弟 ←	兄弟 ←	兄弟 ←	兄弟 ←		
虎 ←		大磯の 虎 ←	母 ←	母 ←	(母) ←		
					八幡 大見 ←	八幡 大見 ←	脇役的な人物
				佐那野 俣田 ←	佐那野 俣田 ←		
	和田 島 ←		和田 島 ←	和田 島 ←			
			祐信 ←	祐信 ←	曾我 祐信 ←		
		景時 ←	梶原 景時 ←	梶原 景時 ←			
		梶原 景季 ←	梶原 景季 ←				
鬼三郎 王 ←	鬼三郎 王 ←	鬼三郎 王 ←					
犬坊 ←	犬坊 ←						

(表1)



場面の連続性を問題にされた事に似ている（「人形劇の成立に関する研究」）。氏はこれを演劇的な問題として考察されたが、この場合にも適用できるかもしれない。しかしそれは別としても、連作物の浄瑠璃が中心的な人物以外の脇役等で連続性を持つことは他にもみることができ、連作物に共通する連続性とあり方という事ができる。ただ「曾我物語」ではそれら脇役の人物の話が、内容的にも緊密な関係を持って巻の間の連続性を形成し、しかもそれが連鎖的になつていゝる事が特徴といえよう。

以上の事から「曾我物語」の場合には、単に先行文芸を借りて浄瑠璃としたとはいえないであらう。その浄瑠璃化においては劇葛藤の因果関係をより明確化する事に重点がおかれると共に、各巻の間で連続性が保てるように考慮されて作られているからである。

「義経記」の場合にもほぼ同じ事がいえる。これも先行文芸の詞章を借りて作られている事は明らかである。典拠としては軍記物の「義経記」を中心として、舞曲の伏見常盤・屋嶋・静・和泉ヶ城・高館・含状、更に「平治物語」や「平家物語」等を挙げる事ができる。しかし浄瑠璃としての特徴は、平家追討の際の義経の武将としての活躍を「平家物語」を借りて描く所によく示されている。先学も指摘されておられるが、軍記物の「義経記」はこの部分を描かない事を作品の重要な性格にしている。従つて英雄時代の義経を描く浄瑠璃は軍記物とは性格を異にしているといえる。そしてその事の中に「曾我物語」の浄瑠璃化に共通したものをみる事ができる。義経の一代を因果関係をはっきりさせて描くには、武将としての活躍譚や、その中の逆轉論をはじめとした梶原景時との争いを省略する訳にはいかないからである。

またこうした浄瑠璃化の姿勢は、義経の一代の盛衰だけでなく、弁慶や伊勢義盛、佐藤兄弟等の描き方の中にもみる事ができる。彼らが義経の郎党にいつどのようになつて加わり、その後どのような活躍をするかといった事がより明確になるように語られているからである。たとえば伊勢義盛が臣下になる事は、「義経記」巻二を借りて描かれるが、平家との戦闘での義盛の活躍についても「平家物語」巻十一の「勝浦合戦の事」の詞章を借りながら語られている。

また各巻の間の連続性の問題についても、「曾我物語」のような明確な連鎖性をみることはできないが、一連になつた話が続きになつた巻に分かれるといった事で作り出されている事を見出すことができる。義盛の話についても二巻と三巻に分かれているが、吉次の供をして東下りの部分でも、鏡の宿での強盗退治は初巻であり、熱田での元服から秀衡入りは二巻と分かれて語られている。忠信の奮戦する吉野合戦もまた四巻と五巻に分かれ五巻では忠信の最期も描かれている。

このようにみると、「義経記」の場合についても「曾我物語」と同様に浄瑠璃化の際に作為の手が加わり、再構成されたものという事ができよう。ではなぜこの時期にこうした物語の全体を語る浄瑠璃が作られたのであろうか。舞曲では既に局面だけを語るものが独立した一曲として演じられている。浄瑠璃でも寛永頃から、舞曲をそのまま借りた「たかたち」や「小袖曾我」などが語られており、正本も残る。これらの曲が独立して演じられるという事は、物語全体が既に広く知られているという事を前提としているものと考えられる。既に知られていたなら、なぜこの時期に全体を語らなければならぬかという事が問題とならう。しかし、しばらく別の形の連

作物にも目を向けてみたい。

#### IV

今までみてきた「浄瑠璃御前物語」や「曾我物語」等は、元になる長篇の物語があり、それを浄瑠璃として語る為に連作物という形になったものといえる。しかしこの時期にはこうした長篇分割型以外にも、一つ一つの作品が完結しながら次々と連鎖的につながる形の続き物や、後日譚的な作品もみることが出来る。これらは始めに元となる長篇の物語があったというより、むしろ観客の好評を得て次々と作品を重ねていったものとも考えられ、長篇分割型の連作物とは性格を異にするといえる。従来はこうした事からも、これら型の相異なる続き物を同列に扱う事がなされてこなかったであろう。しかし明暦・万治という短い期間に集中してこれら続き物になった浄瑠璃がみられる事もあり、この時期の浄瑠璃界の動向や金平物の成立の背景を考える上からは、続き物になった作品を広く考え、そこに共通してみられる浄瑠璃のあり方を考える必要がある。本稿ではこうした観点から、続き物になった浄瑠璃を「連作物」として一括して扱っているが、この章では長篇分割型以外の連作物について、その実態を考えてみたい。

「秀平三代記」と「為朝一代軍記」もこの当時語られた連作物と考えられ、正本に「二日目」や「二之巻」とあるものが残る事から、「曾我物語」等と同じく七巻形式をもっていたのではないかと推定される。しかしその連作法は「曾我物語」のような長篇分割型とはいえない。それぞれの作品がどのように作られているかを具体的に

みてみよう。

「秀平三代記」は奥州藤原氏三代、清衡・基衡・秀衡の事跡を語るものと思われるが、現存するのは初代の清衡の代の物語だけである。初巻に相当すると考えられる現存本には上方板の「御館権太郎」がある。初印が万治三年九月であった事は刊記から知る事ができる。また水谷不倒氏の「浄瑠璃絵入本所在目録」(「水谷不倒著作集」第四巻所収)には、明暦頃刊の江戸板に「御館権ノ太郎清平」という本があった事が記されている。上方板に先行する江戸板があった事が推定される。この初巻は安部貞任の「子厨大尉貞通の謀反を内容とするが、この事件は初巻で完結してしまふ。

二巻については、江戸板と上方板が共に現存する。江戸板は天下一さつま太天正本の『秀平三代記二日目』であり、上方板は「秋田合戦二日目」と内題にあるが、内容は江戸板と同じ事である。この両本は再印本であるが、初印の刊行は挿絵等から万治頃ではないかと推定されている(「古浄瑠璃正本集」第二解題)。この二巻の物語は、清衡の甥の佐藤治信を中心とし、治信が小山二郎の陰謀の為に流浪する事を語るものであるが、これもこの一曲の中で完結してしまふ。

三巻以下の正本については現在みる事ができない。しかし最近林久美子氏によって『松平大和守日記』の浄瑠璃草子列記(万治四年二月十三日の条)の中にある「武平宗平」・「武平むほん」が、三巻以降に相当するのではないかと指摘されている(「江戸浄瑠璃と井上権磨」「文学史研究」22)。武平や宗平は、叛逆者小山二郎の弟として既に二巻の中に登場しており、彼らの反乱が三巻以下で語られたものと思われる。

このように現存本でみる限り、各曲の中で物語は完結し、しかも中心人物は曲ごとに変っている。しかしその時代背景ではつながりを持ち、また登場人物の面での連続性もみられる。それは清衡や佐藤治信のような中心的な人物だけでなく、由利平太のような郎党にまで及び、その名前も巻が変わっても細部まで一致する。こうした人物名での連続性は、「曾我物語」等にもみられたものである。また二巻の冒頭で

佐藤総領信夫左衛門治信とて、弓取一人おはします、然るに治信、さんぬる延久三年、阿太尉貞通が謀反の時、忠節すぐれ給ふにより、伯父御館権太郎清平、よに頼もしく思召

と初巻の内容を語る事から、この両曲が連作である事がより一層明確になる。

このように「秀平三代記」では、各曲が完結しながらも、人物や内容等が連鎖的につながって、奥州藤原氏三代の物語を七巻の形式で語るものであったと考えられる。

「為朝一代軍記」の場合は、八幡太郎義家の孫であり、弓の名手として天下に並ぶものなひとされた英雄、鎮西八郎為朝の一代を七巻で語ったものであろう。英雄の一代記を七巻形式で語るといふ事では「義経記」と同じであるが、連作のあり方に相違がみられる。

この作品が連作物であるとされたのは最近の事であり、「ため朝一代軍記二之巻」という本が紹介された事による。この初巻と考えられる本には「ちんぜいノ八郎のためとも」があるが、初巻が寛文十年、二之巻の元板が寛文末頃の刊行であり、万治頃に語られていた確証はない。しかし正本集の解題でもふれられているように『大和守日記』に「ためとも」の書名がみえ、また万治二年十月には「為

朝官領諍」が上演された記録もある事から、万治頃に連作物として語られていた可能性がある（『古浄瑠璃正本集』第十 解題）。

現存するのはこのように初巻と二巻だけであるが、それぞれの巻は別の事件を内容とし、それが各巻の中で完結している。これは「秀平三代記」の場合と同じといえる。また時代背景でつながりを持ち、郎党等も含めて登場人物の面でも連続性を持つ事も同様である。更に二巻の冒頭部で、前作の内容の概略を語るという事も共通する。

二巻冒頭には

八郎冠者為朝、父の勘当蒙り、筑紫へ追ひ下され、鎮西九か国をことく打かたふけ、豊後の国に御座をすへ、なをしも御手にいらぬい／＼所々をあいなびけん

とあり、これは現存する『ちんぜいノ八郎ためとも』の内容に一致する。このように「為朝一代軍記」の場合の連作法は、「秀平三代記」と殆ど同じといえる。

この「秀平三代記」や「為朝一代軍記」を語った太夫についてもみておきたい。「秀平三代記」の場合については、正本が現在する天下一薩摩太夫が確実な一人である。この薩摩太夫が薩摩を名乗る太夫の誰であるかは以前より問題にされており、横山氏は薩摩外記の系統ではないかとされる。少なくとも外記系の太夫がこれを語った事は、『大和守日記』の万治三年四月二日の条に「秀平三代記」が上演された記事があり、太夫として「外記也 太夫権太夫」と記されている事からも明らかである。水谷氏はかつて自身が所蔵されていた江戸板の初巻について、その内容から和泉太夫正本ではないかとされているが、和泉太夫が語ったという確実な資料はみる事ができない。

また外記系の太夫は「為朝一代軍記」も語ったのではないかと思われる。万治二年に「為朝官領證」を語ったとして『大和守日記』に「下りさつま外記 上るりかたりて権太夫」と記されているからである。

上方でこれらを語った太夫として考えられるのは大和少掾である。林氏も指摘されるように『古播磨風筑後丸』に「たけひらかつせん」の景事がある事から、彼が「秀平三代記」を語っていた事が推定される。更に「為朝一代軍記」の場合も、現存する上方板の初巻は大和少掾正本である。

このように「秀平三代記」と「為朝一代軍記」は連作法が同じであるばかりでなく、語った太夫の面でも共通していた事が分る。現存正本のあり方からみて、これらの連作物もまず江戸で語られ、すぐ後に上方にも入ったものと考えられる。

「秀平三代記」や「為朝一代軍記」は七巻形式を持ちながらも、各巻がそれぞれ完結しながら連鎖的につながった連作物といえる。しかしこうした一曲完結型の作品では、一曲だけでもまとまった内容を語る為、連鎖性が必ずしも見出し得ず、連作であるかどうかを決めるのが困難になる場合もある。そうした作品に、前九年・後三年の役を扱う奥州攻めに関係する浄瑠璃がある。

八幡太郎義家の安部貞任追討を内容とする浄瑠璃としては、従来より上総若太夫正本『八まん太郎琴之縁』(延宝五年・山本九兵衛板)や、土佐少掾正本『武徳鑑』(宝永七年・西村板等が知られていた)。ところが寛文頃の江戸板『八幡太郎義家』が紹介され、これも古くから語られていた事が分ってきた。この寛文板も省略が多く、更に

古い元板があったと思われるが、それが『大和守日記』に記されている「八幡太郎義家」ではないかという推定もなされている(古浄瑠璃正本集 第十 解題)。

この「八幡太郎義家」が万治頃に語られていたとすると、貞任の弟の宗任の後日譚を内容とする『松浦合戦』との関係が注目される。『松浦合戦』の現存正本には、万治三年十月に山本九兵衛板として刊行された上方板がある。これが江戸では明暦頃から語られていた事は、『大和守日記』の上演記事から知る事ができる。明暦四年七月十一日は源之丞が「まつらかつせん」を語り、万治三年五月十九日には、下り薩摩外記、権太夫が「松浦合戦」を語った事が記録されているのである。

また貞任の死後を扱うという事では、「秀平三代記」の初巻『御館権太郎』もその一つとする事ができる。先に述べたように、この初巻で謀反を起こすのは厨大尉貞通であるが、彼は安部貞任の子供という事になっている。またこの本の初段では、貞任を神に祭る事も詳しく語られており、この曲が「秀平三代記」の初巻であると共に、義家の奥州攻めの後日譚にもなっていると考えられる。

これとは別に安部貞任の生い立ちも万治頃には浄瑠璃として語られていた。安田富貴子氏が紹介された『阿部鬼若丸』がそれである。この本は万治三年正月の京・山本九兵衛板であり、題簽に「大和少掾藤原貞則口伝正本」とあるという<sup>(注12)</sup>。この本を中心にして、奥州攻め関係の浄瑠璃について検討された論考も既にでてきている(林氏前掲論文)。それによれば、これらの浄瑠璃を連作とみる事は今の所困難であるが、明暦頃には江戸で語られ、万治には上方へ入ったのではないかという指摘がなされている。

確かに現存本をみる限り、状況設定や登場人物の関係でも連作とする程の関連性や連鎖性は見出し得ない。しかし奥州攻めを内容とする「八幡太郎義家」を中心として、後日譚といえる「松浦合戦」や、貞任の生い立ちを語る「阿部鬼若丸」は、一連になった連作に近い作品群とする事はできよう。

連作物の周辺の作品として、この時期には他にも後日譚や生いたちを語る作品をみる事ができる。連作物全体の問題を考える上で、こうした作品にも注意しておく必要がある。

後日譚を語るものとしては、坂上田村麿の子、広野丸の活躍を描く『曲馬論』がある。坂上田村麿の鈴鹿での鬼神退治の話は室町物語にもみられ、浄瑠璃でも早くから語られている。その後日譚として作られたのが『曲馬論』であり、『大和守日記』にも書名がみえる所から万治頃には語られていたと思われるが、当時の正本は残っていない。

またよく知られた人物の生い立ちを語るものとしては、酒典童子や坂田金平の幼時を描く作品がある。万治三年八月の京・山本板に『酒典童子若壮』（江戸さつまつ太夫正注13）があり、万治末の京・鶴屋板には『公平たんじやうき』がある。『阿部鬼若丸』も含めて、これら三作品は内容もよく似ており、母親が大蛇の化身であるという異常な出生、山で学問せずに乱暴をはたらく等のことが共通し、それぞれが超人的な力をも身につけるその背景としての過去が語られているといえる。

このようにみてくると、明暦・万治という時代には長篇分割型以外にも、さまざまな形の連作的方法で作品が作られていた事が分る。

## V

今までみてきた連作物を整理すると次のようになろう。

まず長篇物語を浄瑠璃用に分割する型のものがある。この中には『浄瑠璃御前物語』のように、詞章に至るまで既にあった物語をそのまま浄瑠璃化するものと、「曾我物語」のように七巻形式に再構成するものがある。

また一曲ごとに完結した内容をもちながら、連鎖的になって連作を形成する型のものがある。この型で七巻形式を持つ作品に、「秀平三代記」と「為朝一代軍記」がある。

この長篇分割型と連鎖型のものが、連作物における基本的な二つの型であったと考えられる。そしてこれらの連作物の周辺に、連鎖性が必ずしも明確でない後日譚や生い立ちを語る作品がある。『曲馬論』や『酒典童子若壮』等が後日譚型の典型であり、後日譚型の作品を含めて一連の作品群を形成するものに、奥州攻め関係の浄瑠璃がある。

さて、それでは金平物の連作はどのようなものであったのであろうか。金平物の場合も一曲の中で一話が完結する。作品間の連続性は時代背景や登場人物の関係で作りに出されており、これは「秀平三代記」などの連作法と同じである。また初段の冒頭等で前作の内容を語るといふ事もみられる。室木氏が連作という考えを出されるのも、こうした点を整理されたからである。

しかし連作物としての形式は「秀平三代記」等とは違っていたと考えられる。「秀平三代記」等が七巻形式をもっていたのに対し、金平物の場合にはそうした形式をもっていなかった可能性が強い。こ

れは金平物の場合、「三代記」や「一代記」のように連作全体で語る内容が決っていたのではなく、人氣に支えられて次々と作品を重ねていくものであった為と考えられる。こうした連作は典型的な連鎖型のものともいえる。

このようにみえてくると、金平浄瑠璃の創作法である連作法も、決して金平物独自のものではなかった事が分る。その連作法は「秀平三代記」にも共通する連鎖法であった。そしてその連鎖型の連作というのも、当時は長篇分割型のものと同様ほど違ったものとは考えられていなかったと思われる。それは「秀平三代記」のような連鎖型の連作物と、「曾我物語」のような長篇分割型の作品が同じ七巻形式をもっており、正本や上演の形式が同じであったと考えられるからである。当時の連作物浄瑠璃は、長篇分割型の典型として「浄瑠璃御前物語」をもち、また連鎖型の典型として金平物をもつが、その間には「曾我物語」や「秀平三代記」のようなこれらの中間型の連作があったのである。そしてその周辺に、後日譚型の作品があったものと考えられる。

さて、それではなぜこの時期に連作的な方法が流行したのであるのか。この問題を考えるには後日譚型の作品から考えた方が分りやすいであろう。たとえば酒典童子の生い立ちを語る作品が成立するには、酒典童子の話が広く知られている事が必要にならう。實際酒典童子の話は室町物語にあり、浄瑠璃でも寛永期から語られていたものである。従ってよく知られた酒典童子の幼い頃がどのようなものであったかという事を語ろうとして、『酒典童子若壮』のような作品が作り出されたと考えられる。これは田村磨の話でも同じである。

田村磨の鈴鹿での鬼神退治は既に語られていたものであるが、その子供がどのような活躍をしたかという事を語ろうとして「曲馬論」が作られたのであろう。すなわち既に語られていた物語の前後に話を発展させて語ろうとしていたのではないかと考えられる。

「為朝一代軍記」においても、英雄為朝として知られているのは「保元物語」で描かれる為朝像である。現在ではみることができないが、七巻物浄瑠璃の後半の巻でもその活躍は語られたのであろう。しかし武家の源氏の中にあっても特に際立った武勇伝説を持つこの為朝が、どのような生い立ちを持っていたかをも語ろうとした事が、一代軍記という連作物をうみ出したと思われる。「秀平三代記」でも、奥州藤原三代の中で最も広く知られていたのは義経伝説に関係する秀衡であろう。その秀衡が奥州の地で、半ば独立国のような形でその勢力圏を持ち得たのも、その父祖の清衡・基衡の力によるものと思われる。この勢力圏を脅かそうとして次々と出てくる輩を、力で押える事で築いてきた国である。それが義経の高館での死と共に崩壊する事はよく知られていた。浄瑠璃は秀衡から代を溯って、この奥州の王国がいかに築かれ、どのようにして守られてきたかという経緯を語ろうとしたのではないだろうか。またそれが義経伝説とどのように関係していくかを語っていたのではないか。浄瑠璃の二巻の主役は清衡の甥の佐藤治信であるが、その孫が義経の股肱の臣である継信・忠信兄弟になる事も語られているのである。清衡の代の物語にも「秀平三代記」という題名を付けている事でも、秀衡から代を溯って語ろうとする姿勢をみる事ができるように思える。

こうした事は、一貫性が最も強いと考えられる「曾我物語」や「義経記」でもみる事ができよう。曾我物にしても、舞曲や浄瑠璃でい

つも語られるのは、仇討ちと仇討ち前の兄弟の苦難の話である。その仇討ちがどうして起こったのかという事が語られる機会はいまよりなかったのではないか。七巻物浄瑠璃がこの部分を特に語ろうとしたものである事は先にも指摘した。なぜ仇討ちが起こったのかという事に重点を置き、物語の全体を語ろうとした事が連作という形になったのであろう。

「義経記」についても、舞曲等で知られているのは吉次の供をして秀衡の元に到着するまでの若き義経像と、兄頼朝に追われ北国落して高館で最期をむかえるまでの晩年の義経像の二つに大きく分かれている。そうした点に人々が義経伝説のどこに共鳴したかをみる事もできるが、浄瑠璃はそれらのいつもよく語られる話の前後がどうなっていたのかという事も語ろうとしたと考える事ができよう。

このように明暦・万治頃の浄瑠璃は、舞曲や寛永期以来の浄瑠璃が語ってきた話を、その前後に話を展開させて語ろうとした。それが連作という形になったと考えられるのである。寛永から承応頃までの浄瑠璃は、室町物語や舞曲等を借りて、それを浄瑠璃節で語っていた。しかし先行文芸を借りて一曲の浄瑠璃とする事にも限りがある。同種のものゝ繰り返しになるのは避けがたい事である。こうした寛永期以来の浄瑠璃化の方法を打開していく一つの方法としてでてきたのが、話を前後に拡げていくというこの連作の方法ではなかったか。勿論先行文芸に依拠するという事では寛永期の方法の延長線上にあるが、この方法によって数多くの曲を新たに作る事が可能になったのである。

金平物が語り出されるのも、頼光四天王の後日譚を語ろうとした事から始まったものと考えられ、これは今述べた当時の浄瑠璃界の

流れの上にある。ただ金平物には典拠となる先行作もなく、それだけに思い切った人物造型も可能であり、そうした事が人々に新鮮に感じられ人気を集める事にもなったのであろう。金平物が単なる後日譚で終わらずに、次々と連鎖的に作品を作り出す事にもなったのも、こうした人々の支持があったからだと思われる。

人々になじみの深い話の前後を語ろうとするこうした浄瑠璃界の新しい動きの背景には、室木氏が指摘された「若者ブーム」もあつたかもしれない。氏は「曲馬論」における広野丸の活躍や、「酒典童子若壮」における悪童丸の剛勇ぶりには「若さを求め、若者に人氣が集中するという時代的空氣」があるとされる（前掲書）。そしてその展型が金平物であつたとされている。しかし若者ブームだけでは、金平物の登場や、この時期の浄瑠璃を考える事はできないであろう。室木氏自身もこの若者ブームは万治二・三年に急激に勃興し、長く続いたわけではないとされている。その底流には「昔我物語」等も含んだ、この時期全体にみられるより大きな新しい動きがあつたと考えるべきではないだろうか。少なくとも浄瑠璃史の展開としては、こうした新しい動きを考える必要があるように思える。

それではこの新しい動きはどこで起こり、どのような太夫によって支えられてきたのであろうか。現存する正本や数少ない資料だけからでは必ずしも明確にできないが、江戸が中心であつた事は間違いないようである。江戸の状態についても正本があまり残っておらず分らない事も多いが、『大和守日記』の上演記事もあわせて考えると、連作物を語った太夫として和泉太夫の他に薩摩外記等の名を挙げる事ができる。この薩摩外記系の太夫が「秀平三代記」や「為朝官領辯」等を語っていた事は先にも述べたが、他にも「松浦合戦」

等連作に關係すると思われる曲を多く語っている。「大和守日記」の寛文元年(万治四年)八月上旬にある「堺町番組」をみても、外記座では「北条八代記」を上演している。その内容は分らないが、題名からみてこれも連作物の可能性がある。一方和泉太夫は金平物の他に連作物を語ったかどうかは確かでない。ただ「田村」(万治初年頃刊江戸板)が彼の正本である所から、後日譚である「曲馬論」も彼が語った事が推定されている。その他の太夫としては虎屋源太夫も金平物の連作に關係していたと推定される。このようにみてくると、江戸の薩摩と杉山という二つの大きな系統の中では、薩摩系が主であり、しかも薩摩の中でもどちらかといえば浄雲直系の系統より、別系や傍系が中心ではなかったかと思われる。ただし「浄瑠璃御前物語」を語ったのは、浄雲に近いと考えられる長門掾であるが、これも連作物の中でも最も旧来の方法を継承したものであり、この時期の連作物流行の中心には位置しないと考えられる。しかし、これら連作物を語った太夫として、和泉太夫以外に外記系の太夫もいた事は重要なことであろう。従来この時期の江戸の浄瑠璃は和泉太夫で代表させて考える傾向があったからである。

江戸で新しい動きがあった事は、金平物が江戸で作られたという事もあり以前より指摘されている事である。そしてその背景には明暦大火後の復興景気があるともいわれる。しかし浄瑠璃界の動きとしては、江戸浄瑠璃界の大黒柱の浄雲の存在も大きいように思える。上方では左内や宮内といった中心となるべき人を失っていたのである。江戸では浄雲を中心に旧来の方法も継承しながら、新しい方向を模索していったのではないだろうか。

一方上方にもかなり早い時期にこれらの浄瑠璃が入っており、専

ら大和少掾によって語られていた。上方板の連作物の正本で太夫の判明するのは殆ど彼のものである。後に播磨掾と名を改め、その語りが義太夫にも継承されるこの大和少掾が、若い頃に盛んにこうした浄瑠璃を語っていた事は、彼の芸風を考える上でも重要な事であろう。また現存上方板の刊行が、万治三年頃に集中しているという事があるが、この事は安田氏の論じられた大薩摩の上京とも関連するかもしれない。<sup>(注14)</sup>

連作物の流行はこのように江戸を中心にして起こり、上方にもすぐに波及するが、この流れの中から金平浄瑠璃もみ出されてきたものと思われる。

## VI

ここまでは金平浄瑠璃成立の基盤という事で連作物の浄瑠璃について考察を加えてきた。そこで次にこの連作物の意義について考えてみたい。それはこの時期の浄瑠璃が、連作という形をとることによって、一曲の浄瑠璃では語ることのできなかつた大きな時代の流れを語る事を可能にしたと思われるからである。以下その事を各作品で具体的に考えてみたい。

「曾我物語」等の場合には、浄瑠璃が主な典故とした軍記物語が既に大きな時代の流れを語る事になっている。しかし舞曲や寛永期の浄瑠璃のように、局面だけを語っていたのでは分らない大きな流れが、連作として語り出されたという事はできよう。それは単に一族の間での何代にもわたる争いが語られたという事ではない。曾我の仇討ちの背後には、頼朝を中心にして展開する大きな時代の流れがあり、それを語り出す事ができたのである。曾我兄弟は工藤祐経



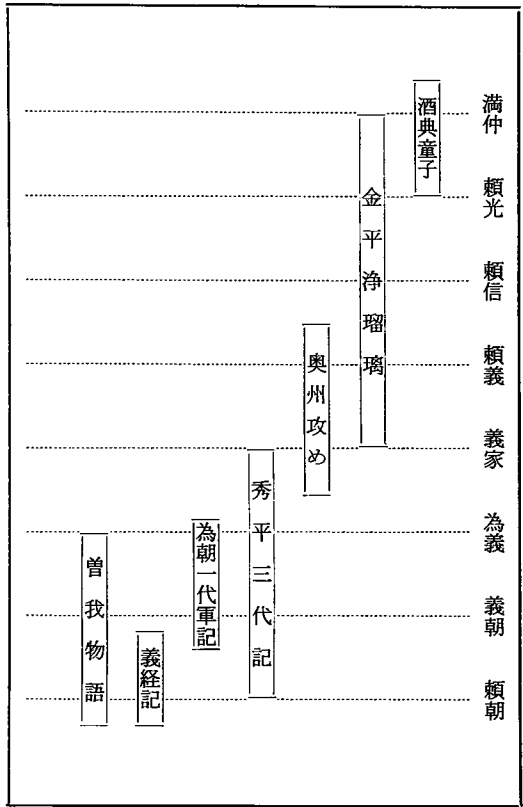
の敵であったばかりでなく、頼朝にとっても敵になる。その背景には伊豆に配流中であつた頼朝が、兄弟の祖父によつて我が子を殺されるという事があり、更に石橋山合戦でもこの祖父が頼朝に敵対したという事がある。そしてこの石橋山合戦が時代を変える戦いであつたと共に、兄弟の運命をも決めた合戦であつたのである。これらを背景とする事によつて幼い兄弟を殺そうとする「切兼」の場面もあり、また兄弟が赤貧の中で仇討ちの機会を持つ事にもなる。更に「夜討曾我」の仇討ち後の五郎の取り扱いにも関係してくるのである。こうした因果応報の大きな時代の流れが浄瑠璃として語り出されたのも、これが連作物であつた為である。

「秀平三代記」の場合、その初巻で安部貞任が神に祭られることが語られ、更に貞任の子の反乱を鎮圧する事が語られている事は先にも述べた。従つてこれが後三年の役の後日譚にもなっているのであるが、奥州藤原氏の王国はこの貞任の反乱の終結と共に建設されるといふ時代背景があり、浄瑠璃では後半の巻をみる事ができないが、おそらく秀衡と義経の話があり、この王国の崩壊も語られていたものと思われる。いかに奥州の王国といふとその建設と崩壊には中央政権の動向と深く関与する。そしてそうした時代背景の下での奥州藤原三代という大きな状況を語る事を可能にしたのも、浄瑠璃が連作物という形であつたからであらう。

金平物について考えても、これが連作ということによつて時代状況が語り出されているのを見ることが出来る。従来あまり注目されていない様であるが、金平物の時代背景は決して荒唐無稽に作られている訳ではない。それは四天王の名家である源氏の代々を踏まえているからである。綱や金時等の親四天王は頼光四天王として

知られるように頼光の臣下であるが、親四天王から子四天王へ移る作品では頼光の弟の頼信の時代とされている。また子四天王が活躍するのは頼信の子頼義の時代とされ、孫四天王が登場する頃には八幡太郎義家の時代に移ろうとする時代とされているのである。すなわち金平物の時代背景は親四天王時代も含めると、頼光の親の満仲から義家までの源氏五代にあたる。こうした時代背景によつて状況が作り出されている為、頼光の跡目をめぐつて弟の頼信と嫡子の頼親が争う『頼光跡目論』のような作品も作られてくる。また金平物の中で金平の烏帽子子として登場し、孫四天王にあたる人物に鎌倉権五郎景政がいる。この景政は八幡太郎義家の郎党として知られる人物で、特に奥州攻めの時に片眼を射られた後も奮戦するという英雄伝説が有名である。この話は「平家物語」や「平治物語」にも語られており、浄瑠璃でも奥州攻めを内容とする『八幡太郎義家』の中で語られている。こうした人物が登場する事も、金平物が時代背景を考慮に入れて作られている為であらう。

「浄瑠璃御前物語」を除くと、この時期の連作物は主に軍記物を語っていると見える。特に源氏の棟梁を自称する徳川政権下という事もあつてか、源氏に関係する軍記物が多い。そしてこの源氏の代々を中心として時代背景が作られているのであるが、この様な武士を中心とした時代把握は近世化したものであろう。「酒典童子」の頼光をはじめとして、金平の主君である頼義等は、歴史的には摂関家に仕える武士団の棟梁にすぎないが、浄瑠璃では天下に号令する將軍として描かれているのである。しかし武士を中心とする事によつて、浄瑠璃の時代背景はかえつて単純で分りやすい形になつたとも見える。連作物の浄瑠璃がこのような武士を中心とした時代把握の



〔表2〕

分らないが、彼が和泉太夫の金平物の創作に關与していた事は作者の署名入りの正本が現存していることから確かであろう。この岡清兵衛について貞享四年刊の『故郷婦の江戸咄』は

金平作りの清兵衛は。生れつき才発にして。物覚つよく。太平記。盛衰記あづまかがみなどを。そらにおぼえ。儒釈哥道をも。少づはこころみければ古事来曆を引事得もの也とかや。

と記す。実際に清兵衛が太平記や盛衰記、吾妻鏡などを空で覚えていたかどうかは別としても、その程度の知識を持つ人物が、金平以外の連作浄瑠璃にも關与していたのではないかと考えられる。

中で、どのような時代を語っているのかをまとめたのが〔表2〕である。金平物を含めそれぞれの連作物がどのような時代を語ろうとしていたのかという事や、金平物と他の連作物との関係もこの表から知る事ができよう。

また金平物に鎌倉権五郎景政が登場する事や、「秀平三代記」の初巻が奥州攻めの後日譚に相当する事などから、浄瑠璃を作る側の人間がこうした時代背景をある程度知った者であったと思われる。この当時の作者としては『にしきど合戦』（承応四年刊）等に名を残す岡清兵衛等が知られている程度である。この清兵衛についてもよく

刊年は少し下るが「頼朝三代記」（寛文九年刊）や、寛文六年に外記座で上演されている「北条八代記」も連作物と思われる。更に『大和守日記』にも書名がみえ、「東海道名所記」で喜太夫が語ったとされる「太平記」も連作物であろう。頼朝以降の時代についても、連作物でそれぞれの時代が語られていた可能性がある。

従来はこれら連作物の流行というのは、短期間にみられた小さな動きという事ですまされてきた。確かに続き物として語られていた時期は短かったかもしれない。金平物の場合でも連作として作られるのは万治頃からせいぜい寛文の初め頃までであり、その後はそれ

それ独立した一曲として作られている。また鳥居フミ子氏が論じられたように、曾我物の古浄瑠璃の場合でも、寛文以後は七巻物を元としながらも、それに多少手を加えてそれぞれが独立した一曲として上演されている(前掲論文)。

しかし連作物の浄瑠璃が大きな歴史的状況を語っていたということを考えれば、その流行を短期間の小さな動きで済ますことはできないであろう。それは連作物として作られる事がなくなっても、これら連作物で語り出した時代背景や人物関係を基礎とした作品が作られ続ける事でも分る。特に時代背景や人物関係を浄瑠璃自らの手で作り出した金平物において、この事が顕著にみられる。金平物も元禄頃まで作品を残すが、その人物関係等はこの時期の連作物が作り出したものを用いており、その中でたとえば『金平恋之山入』といった曲を語るのである。従って万治頃の連作物が金平物の枠組を決めてしまったともいえる。

また先にも述べたように、元禄頃になって長篇軍記物が次々と出版されるということがある。曾我物のように別々の曲として語られていたものも、また元の明暦頃の本文を持つ七巻形式で出されるのである。連作物の流れというのは、底流として流れ続けていたと考えられる。勿論それらは読本という形であったかもしれない。が、そうした長篇軍記物の出版が元禄期にブームになる背景には、これらの作品が歴史的事件の時代背景や人物関係を明確にしながら大きな状況全体を語るという事があったのかもしれない。元禄期の浄瑠璃界は、改めてそうした全体の状況を語るものを必要としていたのではなからうか。浄瑠璃はまた一つの大きな転機をむかえて、連作物が語っていた大状況の枠組の元で、新たな展開をみせようとして

いたことも考えられる。

明暦・万治頃の連作物浄瑠璃は、このように歴史的事件の大状況を語っていた。金平物が画期的な作品とできる理由の一つも、こうした大状況を浄瑠璃自らが語り出したことであろう。そしてこのように時代背景や人物関係という大状況の枠組を語るという事は、後の浄瑠璃の展開にも一つの大きな方向性を与えるものになったのではなからうか。後の劇書にいう「世界V」ということにも関連する問題が、この時期の連作物浄瑠璃に内包されていたのではないかと考えるからである。

#### (追記)

本稿は明暦・万治頃の連作物浄瑠璃についての二部作の第一部である。第二部は、金平浄瑠璃を連作物という観点から考察するものであり、第一部である本稿とも絡んだ問題も数多いが、稿を改めて論じたい。

#### 注

(注1) 金平浄瑠璃が流行した因を、明暦大火前後の江戸の気風と関連付けて考えようとする事は、黒木勘蔵氏の『浄瑠璃史』以来、水谷不倒氏『新修絵入浄瑠璃史』、若月保治氏『古浄瑠璃の研究』、角田一郎氏『岩波講座・日本文学史・古浄瑠璃』、更に至木弥太郎氏の『語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』等に継承されている。

(注2) 安田富貴子氏「明暦・万治頃の京都」(『古浄瑠璃正本集』第六所収)は、この頃の太夫の動向に関して詳細な論考である。

(注3) 安田富貴子氏「近世受領考」(『古浄瑠璃正本集』第六所収)によると、上方では大和少掾・山城少掾・上総少掾・出羽掾が揃って明暦四年に受領し、江戸では明暦二年に長門掾、万治四年に肥前掾、寛文二年

に丹波少掾(和泉大夫)が受領している。

(注4) 室木弥太郎氏「和泉大夫時代の江戸の四天王物」上・下(国語と国文学)昭和三十七年七月・八月)、同氏前掲書及び同氏編の『金平浄瑠璃正本集』(全三巻)の解題等で指摘されている。

(注5) 麻原美子氏「幸若舞曲考」・山下安明氏「軍記物語の方法」等

(注6) 「鸚鵡ヶ杣」(正徳元年刊)は五部の本節の一つとして「五輪くたき」を挙げる。寛永の女大夫六字南無右衛門が語った「やしき」にはこの五輪くたきの部分が入っている。また慶安四年刊の宮内正本『ぶきあけひてひら』も独立した一曲のものではないかと思われる。

(注7) 昭和五十七年七月の演劇研究会例会で、所蔵省である信多純一氏より以下のことが紹介された。

義経記四之巻(外題「義経記 吉野合戦」)

。半紙本一冊 十六行十六丁 (巻末欠丁あり。内容から考えて一丁半から二丁欠けているものと思われる)。

。元題巻が残っている。下部は破れて読めないが、八文字屋板の『義経記初巻』の題簽と同じ型式である。上の方に「義経記 四丁目」と二行。界線をおいて「吉野合戦」とあり、その左側に「天下一大和少掾藤原□則」とある。その下は破れて読めないが、左側に「九兵」とある。おそらく「二条通」正本屋「九兵衛」とあったものと思われる、山本板であった事が分る。

。段数は五段か。土佐少掾本の三・四段が第三としてまとめられている。各段には章題が付いているが、その内容は土佐少掾本の題簽に書かれているものとほぼ同じである。

。水谷不倒氏がかつて所蔵され、後に松遊舎文庫に譲された本に、万治三年極月、山本九兵衛板の「義経記三・四ノ巻」二冊があった事が記録されている(浄瑠璃絵入本所在目録)。信多本の「義経記四之巻」は巻末欠丁の為に刊記をみる事ができないが、水谷氏の記

録からこの山本板の刊行は万治三年極月であったと考えられる。

(注8) 和歌山大学経済学部 紀州経済史文化史研究所蔵。安田富貴子氏はこの文書を中心にして「紀州和歌山字治の産・字治加賀掾の世界」(橘女子大学紀要10号)を発表されている。またこれとは別に土田衛氏

により昭和五十八年八月の演劇研究会例会でこの文書が紹介され、特に『家業』の芸能記事については、詳細な整理報告がなされた。

(注9) 島津久基氏「義経伝記と文学」・岡見正雄氏 岩波大系「義経記」解説など

(注10) 『浄瑠璃正本集』第二 解題で横山重氏は薩摩太夫を「大さつま」と「小さつま」の二系に分けて考えておられる。また安田氏も(注2)の論考の中で、この問題を更に詳細に検討されている。

(注11) 安田富貴子氏「ハバード・エンチン図書館蔵『阿部鬼若丸』紹介」

(注12) 「国語国文」昭和五十五年八月)

(注13) 大和少掾が奥州攻め関係の浄瑠璃を語った事は、彼の正本として『阿部鬼若丸』が現存する他に、『古播磨風筑後丸』に「八幡太郎印揃へ」の景事もみられることから推定される。

(注14) 『公平たんじやうき』の初段には「後頼義、八幡殿の御代までに、三国無双の強物、坂田兵庫守金平とは、此若が事もき」とあり、金平の名や、その活躍が知られるようになった後に作られたことが分る。

(注15) 安田富貴子氏(注7)の論文参照。『語式留帳』に、万治二年五月に薩摩太夫(大薩摩ともある)が京の二条河原で興行した記事があるという。

(注16) 景政について語る浄瑠璃も既に万治頃にあったらしい。『大和守日記』に「かげ政」の書名がみえる。現存本としては後のものであるが「かけ正いかづちもんたう」があり、これの上方板の『いかづち論』もある。